

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22730383

研究課題名（和文） 顔に疾患や外傷をもつ人々が直面する就労問題に関する実証研究

研究課題名（英文） Employment-related Difficulties: Understanding the Experiences of People with Visible Differences

研究代表者

西倉 実季（NISHIKURA MIKI）

同志社大学・文化情報学部・助教

研究者番号：20573611

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、顔に疾患や外傷をもつ人々が就労をめぐる直面している困難の実態を把握することである。質問紙調査の結果、仕事をしている人のうち、過去 1 年間に職場でハラスメントを受けた経験があるのは約 35%であり、そのうち職場で誰かに相談しているのは約 40%であった。相談をしない人のうち約 45%は、ハラスメントに対して職場が適切に対応してくれることを諦めていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research is to explore the various difficulties that people with facial/visible differences experience in terms of employment. According to the research, about 35% of people with paid work have experienced harassment in their workplace in the last twelve months. Nevertheless, about only 40% of them talk to someone about the rude behavior of co-workers. About 45% of people who tolerate without consulting anyone else give up an appropriate response to harassment in their workplace.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：顔の疾患・外傷、ディスアビリティ、就労

1. 研究開始当初の背景

顔という身体部位がもつ社会的重要性を考慮すれば、疾患や外傷が原因で顔に特徴をもつ人々が日常生活において様々な困難を経験していることは想像に難くない。しかし、日本ではごく最近まで、彼らの心理や社会生活は研究対象とされてこなかった。英米では、

1980年代以降、疾患や外傷による顔の特徴が深刻な心理的問題をもたらし、社会的相互行為にも多大な影響を及ぼしていることが認識され、心理学的視点による研究が蓄積されてきた (e.g. Bull & Rumsey 1988)。

社会的出会いにおけるこうした困難は、顔に疾患や外傷をもつ人々の社会活動、なかで

も就労に大きく影響している。疾患や外傷による顔の特徴は、個人的資質やジョブスキルを低く評価されるなど、採用判断に悪影響を与えていることが指摘されている (Stevenage & McKay 1999)。また、顔に疾患や外傷をもつ人自身も、他者からの否定的反応を避けるために、人目につきにくい職業を選択する傾向にあることが指摘されている (Bradbury 1997)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、質問紙調査により、顔に疾患や外傷をもつ人々が就労をめぐる直面している困難の実態を把握することである。

3. 研究の方法

2010年度前半は、関連諸分野(心理学、就労に関する既存の統計調査)の調査・研究を行ったうえで、顔に疾患や外傷をもつ人々の就労をめぐる困難を的確に把握しうる調査票を作成した。後半は、顔に疾患や外傷をもつ人々による当事者団体や患者会に協力を依頼して、プリテストを実施した。調査対象者からの意見やコメントをもとに、質問項目を再検討した。その後、合計7つの当事者団体および患者会の協力を得て、本調査を実施した。調査票は総計623票配布し、284名より有効票の返送があった(回収率45.6%)。

本調査に協力していただいたのは、以下の7団体である。

- アロペシアラボラトリー
- 大阪アザの会
- 大阪乾癬患者友の会
- 円形脱毛症を考える会
- 眼瞼下垂の会
- 血管腫・血管奇形の患者会
- 口友会

(あいうえお順)

2011年度は、本調査で得られたデータの入力・整理および分析を実施した。分析にあたっては、18歳以上65歳未満の253人のデータを対象とした。

まず、顔に疾患や外傷をもつ人々の就労の実態を、仕事の有無、雇用形態、職種、1年間の収入、(就労との両立していかなければならない)治療にかかる金額、(社会生活を送る上で必要となる)疾患や外傷を隠すための商品の購入にかかる金額などの側面から検討した。次に、顔に疾患や外傷をもつ人々の就労をめぐる困難のうち、職場でのハラスメント被害に注目して検討を進めた。具体的には、職場ハラスメントの被害経験と社会的スキルにはどのような関連があるか、ハラスメントの被害経験と職場満足度にはどのよ

うな関連があるか、カイ二乗検定を用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 回答者の属性

回答者の疾患・外傷の種類は、円形脱毛症が108人と最も多く、全体の約4割にのぼった(図1)。

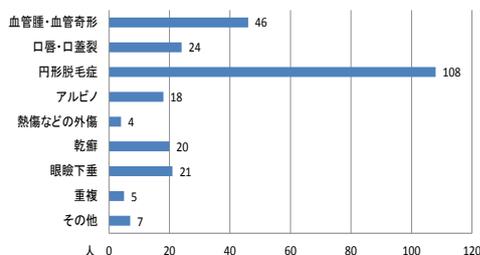


図1 疾患・外傷の種類

また、回答者のうち、男性は約25%(65人)、女性は約75%(188人)である。回答者の年齢をみると、30歳代が33.2%と最も多く、次いで40歳代が30.0%である。回答者の婚姻状況は、約半数が「未婚」、約45%が「配偶者あり」である。

(2) 医療と日常生活について

回答者のうち、2010年の1年間に、図1の疾患・外傷のことで医療機関を受診した人は43.5%で、受診していない人よりも少ない。1年間あたりの自己負担額をみると、5万円以上の人々が医療機関を受診した人の約4割を占めている。医療機関を受診した人のうち、1割強(14人)は30万円以上も負担している(図2)。

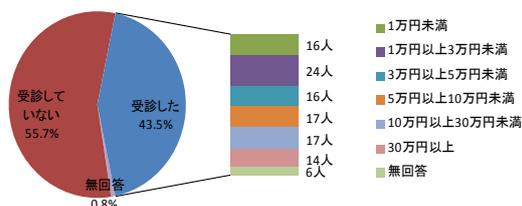


図2 医療機関の受診状況と自己負担額

回答者のうち、普段、図1の疾患・外傷が見た目でわからないようにするための商品(ウィッグ、カムフラージュメイク、ヘアカラーリング剤など)を使用している人としていない人は、およそ半数ずつに分かれた。

これらの商品を購入するために1年間あたり平均してかかる金額をみると、商品を使用している人の半数(64人)は10万円以上、

約 2 割弱 (22 人) は 30 万円以上となっている (図 3)。

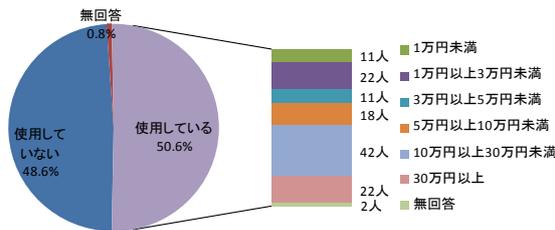


図 3 ウィッグ等の商品の使用状況と購入にかかる金額

(3) 就労について

回答者のうち、仕事をしている人 (「仕事をおもにしている」「家事がおもで仕事もしている」「通学がおもで仕事もしている」「家事・通学以外のことがおもで仕事もしている」を選択した人) は約 80%、仕事をしていない人 (「家事をしている」「通学している」「その他」を選択した人) は約 20% である。

仕事をしている 201 人のうち、もっとも多いのは「正規の職員・従業員」、次に「非正規の職員・従業員」となっている (図 4)。平成 19 年『就業構造基本調査』によると、仕事を持つ人のうち、正規に雇用されている人は約 50%、非正規雇用者は約 38%、自営業主は約 10% である。今回の回答者の「正規の職員・従業員」および「非正規の職員・従業員」の割合は、この数字とほぼ同じである。

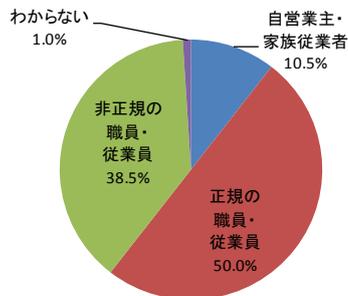


図 4 雇用形態

研究代表者がこれまでに実施したインタビュー調査では、たとえばウィッグを被っていることやカムフラージュメイクをしていることを職場の人に知られる前に転職を繰り返すなど、ひとつの職場で長く働けず、そのため正規雇用に就くのが難しいという体験談を聞く機会もあった。しかし、今回の調査では、一般の就労調査と比較して、非正規雇用の割合が高いという結果はみられなかった。

仕事をしている人の職種は、「事務職」が

最も多く、次いで「専門的・技術的職業」、「サービス職業」となっている (図 5)。

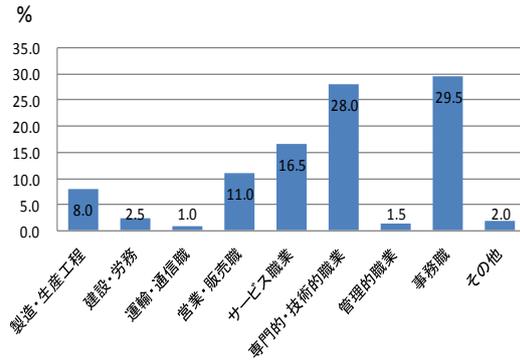


図 5 職種

『就業構造基本調査』と比較すると、今回の調査では「専門的・技術的職業」、「事務職」、「サービス職業」の人の割合が高く、逆に「生産工程・労務」(『就業構造基本調査』に統一して、本調査の「製造・生産工程」と「建設・労務」を合わせて「生産工程・労務」とした)の人の割合が低い (図 6)。

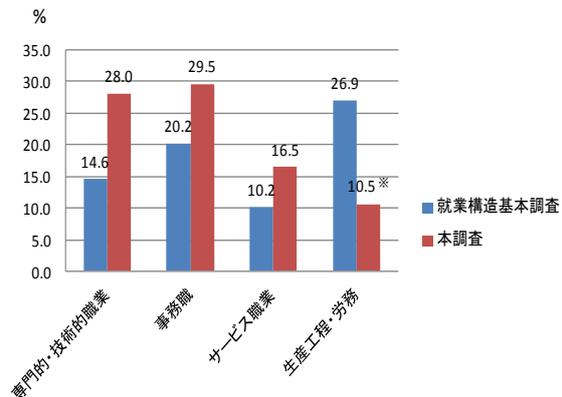


図 6 職種の比較 (就業構造基本調査と本調査)

英米の研究には、見た目問題当事者は人目につきにくい職業を選ぶ傾向があると指摘するものもある (e.g. Bradbury 1997)。しかし、サービス職業に就いている人の割合は決して低くないうえ、製造・生産工程や建設・労務に従事している人の割合は低いことから、今回の調査ではそうした傾向は確認できなかった。

仕事をしている人の 2010 年 1 年間に働いて得た収入は、「250 万円未満」が最も多く、仕事をしている人全体の約半数を占めている。『就業構造基本調査』と比較すると、今回の調査では、「500 万円未満」と「(500 万円未満の)うち 300 万円未満」の人が多く、反対に「500 万円以上」の人が少ないことが

わかる (図 7)。

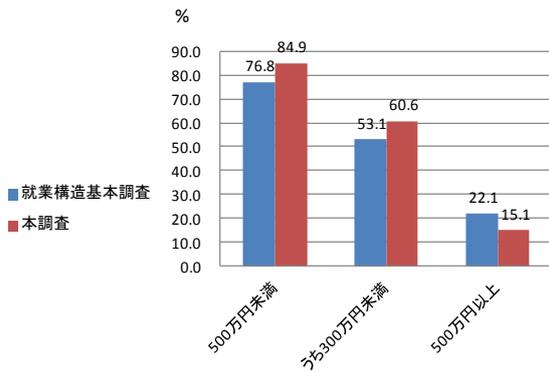


図 7 1年間の収入の比較 (就業構造基本調査と本調査)

(4) 職場での人間関係について

仕事をしている人のうち、職場の上司や同僚に疾患や外傷のことを「説明している」人は約 40%である。一方、「説明しておらず知られていない」人は約 30%である (図 8)。

「説明しておらず知られていない」を選択した 65 人に、疾患や外傷のことを説明していない理由を質問したところ、約 70%の人が「仕事に影響がないので説明する必要がなかったから」と回答している。「説明する機会がなかったから」、「説明してもわかってもらえないと思ったから」と答えた人も、それぞれ約 10%となっている。

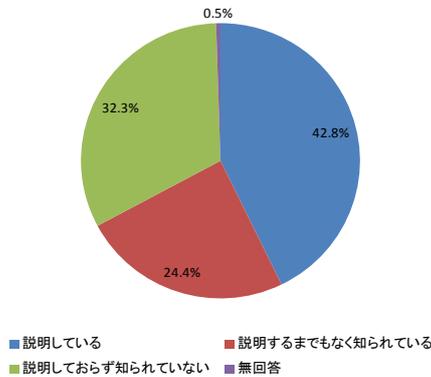


図 8 上司や同僚に疾患・外傷のことを説明しているか

この調査では、全 9 項目を設け、仕事をしている人に過去 1 年間に職場でハラスメントを受けた経験の有無と頻度について質問した。仕事をしている人 201 人のうち、9 項目中ひとつでも「何度もある」または「一、二度ある」と回答した人は、約 35% (67 人)であった。

今回の調査では、判断が恣意的になってしまうため、これらのハラスメントが回答者の疾患や外傷に由来するものかどうかは問わ

なかった。しかし、仕事をしている人のおよそ 3 割が、過去 1 年間に職場でハラスメントを受けた経験があるという結果は、今後、「見た目とハラスメント被害」という問題を検討していく必要性を示している。

項目別にみると、経験した人が最も多いのが「いやなことを言われる」であり、仕事をしている人の 25%にのぼる。「何度もある」と答えた人が約 10%、「一、二度ある」と答えた人が約 15%である。2 番目に多いのが、「仕事に必要な教育や訓練が与えられない」でそれぞれ約 10%である (図 9)。

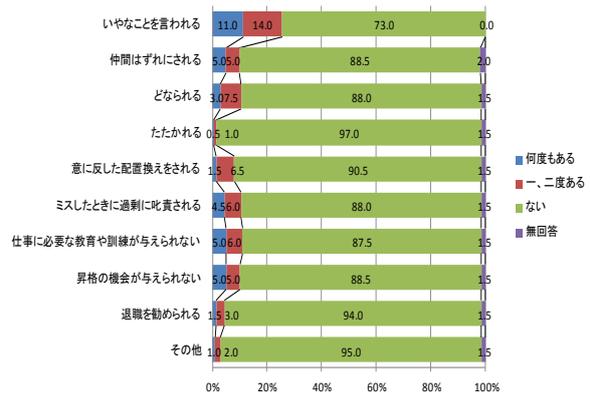


図 9 ハラスメントを受けた経験の有無 (項目別)

職場でのハラスメントを受けた経験のある人 67 人に、そのことについて職場で誰かに打ち明けたり相談したかどうかを質問したところ、「相談した」が約 40%であった。一方で、「相談しようと思わなかった」も約 40%であり、ハラスメントを受けた際の対応は大きく 2 つに分かれている (図 10)。

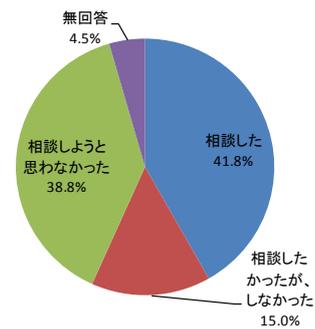


図 10 相談の有無

「相談したかったが、しなかった」または「相談しようと思わなかった」と回答した 36 人に、相談しなかった理由を質問した (複数回答)。最も多いのが「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけると思ったから」で、相談をしない人のうち約半数は、ハラスメントに耐えることで対処している。

2 番目に多いのが「相談してもきちんと対応してくれないと思うから」で、相談をしない人のうち約 45%は、ハラスメントに対して職場が適切に対応してくれることを諦めていることがわかる。

また、社会的スキルの高低とハラスメントの被害経験との関連を検討した。これは、職場で他者と関係を構築したり維持したりするスキルが高い人の方が、ハラスメントを受けにくいのではないかという仮説を立てたことによる。社会的スキルについては、菊池章夫が開発した KiSS-18 (Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items) を因子分析した結果 (田中 2007) にもとづき、コミュニケーション・スキルを測る項目 3 つと、トラブルシューティング・スキルを測る項目 5 つを取り入れた。各項目は 5 件法とし、1~5 点までの間で点数化して合計点を求めた。対象者全員の平均点以上の群と平均点未満の群に分け、ハラスメントの被害経験の有無との関係を調べたところ、社会的スキルが平均点以上の群の方がむしろハラスメント被害を経験しており (表 1)、上記の仮説は正しくないことがわかった。

表 1 社会的スキルの程度別にみたハラスメントの被害経験の有無

社会的スキル	ハラスメントを受けた経験		合計
	ある	ない	
平均以上	43 (41.0%)	62 (59.0%)	105 (100.0%)
平均未満	27 (27.8%)	70 (72.2%)	97 (100.0%)
合計	70 (34.7%)	132 (65.3%)	202 (100.0%)

$\chi^2=3.83$ $p=0.0503$

(5) 仕事満足度について

この調査では、全 7 項目を設け、仕事をしている人に現在の仕事についての考え (満足度) を質問した。項目別にみると、「そう思う」と回答した人が最も多いのが「やりがいがある」で約 40%である。「どちらかといえばそう思う」を合わせると、8 割以上の人々が現在の仕事にやりがいを感じていることがわかる。逆に、「そう思わない」と回答した人が最も多いのが「将来設計が立てられる」で約 25%である。「どちらかといえばそう思わない」を合わせると、過半数の人が、現在の仕事では将来設計が立たないと感じている。また、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると、7 割以上の人々は現在の仕事に全体として満足している (図 11)。

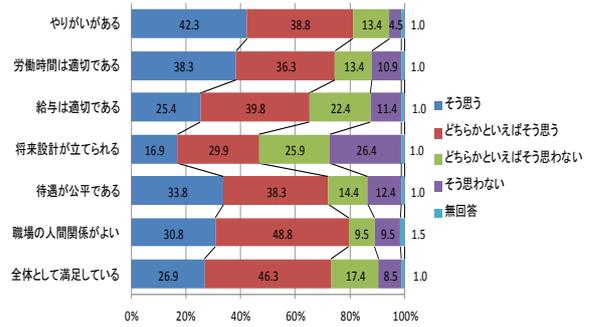


図 11 現在の仕事についての考え

過去 1 年間に職場でハラスメントを受けた経験の有無と仕事満足度との関係を分析したところ、ハラスメントを受けた経験がある人は、ない人よりも、現在の仕事に満足していない割合が高いことがわかった (表 2)。職場ハラスメントは、仕事満足度に影響を及ぼすと考えられる。

表 2 ハラスメントを受けた経験別にみた仕事満足度

ハラスメントを受けた経験	現在の仕事に全体として満足している				合計
	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	
ある	7 (10.6%)	28 (42.4%)	19 (28.8%)	12 (18.2%)	66 (100.0%)
ない	46 (36.2%)	62 (48.8%)	15 (11.8%)	4 (3.1%)	127 (100.0%)
合計	53 (27.5%)	90 (46.6%)	34 (17.6%)	16 (8.3%)	193 (100.0%)

$\chi^2=29.7$ $p<0.0001$

(6) まとめと今後の課題

顔に疾患や外傷をもつ人々日本国内だけでなく、諸外国でもほとんど研究がなされていない。とくに、アンケート調査によって数値データを収集し、分析した研究は見当たらない。医療費の自己負担額、ウィッグやカムフラージュメイク等の購入費、1 年間の収入など、見た目問題当事者をとりまく問題を数字によって具体的に把握できた点は、本調査の意義である。

今回の回答者のうち、1 割以上の人々が 1 年間に 10 万円以上の医療費を負担し、4 分の 1 の人がウィッグ等の商品の購入に 1 年間で 10 万円以上かかっていることがわかった。一方で、1 年間の収入をみると、250 万円未満の人が、仕事をしている人の半数を占めている。もちろん、これは回答の分布を単純にみた結果に過ぎないが、決して収入は高くはないものの、医療費や商品購入の負担額が大きいという問題が指摘できるのではないかと考えられる。この報告結果をもとに、今後さらなる

統計的な解析作業を行うことで、これらの問題をより詳細に分析していくことが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

1. 西倉実季、ライフストーリー研究における「語りの方法」、第83回日本社会学会大会、2010年11月6日、名古屋大学

[図書] (計3件)

1. Nishikura, Miki, 2012, “Three Employment-related Difficulties: Understanding the Experiences of People with Visible Differences” in Akihiko Matsui et al. Eds. *Creating a Society for All: Disability and Economy*, Disability Press, 125-133
2. 西倉実季、「顔の異形は『障害』である—障害差別禁止法の制定に向けて」松井彰彦・川島聡・長瀬修編『障害を問い直す』東洋経済新報社、2011、25-54
3. 西倉実季、「『異形』から『美』へ—ポジティブ・エクスポージャーの試み」倉本智明編『手招くフリーク—文化と表現の障害学』生活書院、2010、77-101

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西倉 実季 (NISHIKURA MIKI)

同志社大学・文化情報学部・助教

研究者番号：20573611